

政治的中立の不可能性^{*} The Impossibility of Political Neutrality

岩佐 憲明

1. はじめに

現代の一部のリベラルな哲学者にとって、大きな関心事は、リベラルな中立(liberal neutrality)、つまり、人々が追求する競合する道徳的価値観に対して、国家は中立であるべきだという考えである。『自由の道徳性(*The Morality of Freedom*)』において、ジョセフ・ラズ(Joseph Raz)は、そのような中立は実現不可能であり、それに近づくことさえできないと論じる。本稿は、政治的中立に関するラズの主張を考察し、それをヴォイチェフ・サダースキー(Wojciech Sadurski)の批判から擁護する。そして、なぜ政治的中立はほとんど実現不可能なのかを説明する理論を提示する。最後に、哲学的に言えば、中立な政治に中立な根拠がないことを示す。

2. 政治的中立に関するラズの主張

ラズは、政治的中立に関する二つの方針を区別する。

対象範囲に関する方針

A: それぞれの人がたまたま持っている価値(good)の理想を実行する機会に関する中立。

B: A におけるような中立、それと、人が別の価値観(conception of the good)よりも、ある価値観を採用する可能性に関する中立。

B はより極端な方針である。A を好む何か特別な理由がなく、中立を支持する作家がこの問題に関する発言をほとんどしていないことを考慮し、私は、中立の原理は B におけるような中立を提唱しているものとみなす¹。

サダースキーは、A は現実的で実行可能だが、B はリベラルにとって不可能かつ不必要な負担だと考える²。しかしながら、後に見るように、実際には A でさえ、ほとんど実現不可能である。

^{*} 本稿は、次の拙稿を翻訳したものである。Noriaki Iwasa, “The Impossibility of Political Neutrality,” *Croatian Journal of Philosophy*, Vol. 10, No. 29 (2010): pp. 147–155.

¹ Joseph Raz, *The Morality of Freedom* (Oxford: Oxford University Press, 1986), p. 112.

² Wojciech Sadurski, “Joseph Raz on Liberal Neutrality and the Harm Principle,” *Oxford Journal of Legal Studies*, Vol. 10, No. 1 (1990): pp. 123–125.

ラズは、中立の二つの意味を挙げる。その一次的な意味では、「当事者の運命に影響を与える場合にのみ、そして、彼らを同じ程度援助または妨害する場合、かつ、その行為が当事者の運命に等しい影響を与えるという事実に本質的に依存している、そう行為する理由があると信じるゆえに行為する場合に、その行為者は中立である」。ラズは、これを「原則に基づく中立(principled neutrality)」と呼ぶ。「中立の二次的な意味は、人々が当事者の運命に影響を与える場合、かつ、人々がすべての当事者の運命に、そうする理由にかかわらず、等しく影響を与える場合に、それらの人々を中立だとみなす」。ラズは、これを「副次的中立(by-product neutrality)」と呼ぶ。「というのは、この場合、中立は行為者の行為の偶然の副次的結果であり、その行為の意図する結果では多分ないからである」。いくつかの政治理論は、「それらの理論に従う行動が、副次的結果として中立でもあるようなものかもしれない」が、それらの理論はラズが特別に関心を持っているものではない。ラズの関心は、原則に基づく中立を求める政治理論にある³。

「中立的に(neutrally)行為することは公正に(fairly)行為することだという混乱した考え」⁴に反論するために、ラズは、アラン・モンテフィオーレ(Alan Montefiore)の次の例を挙げる。

二人の子供がそれぞれ、自分たちの間の口論に援助をもって介入するように、父親に訴えるかもしれない。父親は、もし単に「介入することを拒否」すれば、より強くより機略に富んだ年上の子供がきつと勝つことを知っているかもしれない。もし父親が、両方の子供に対し同程度の援助や妨害をもって積極的に介入しても、結果は必然的に同じだろう。……言い換えれば、中立のままであろうとする決定は、われわれの現在の定義の表現によると、ありのままでより強い子供が勝つのを許す決定になるだろう。しかし、これは、より弱い子供には、非常に変わった形の中立のように見えるかもしれない⁵。

その父親は、介入しないことで、中立かもしれない。しかし、これは、より弱い子供にとって不公正である。ラズは、「たとえ……中立が公正な競争の手段として正当化され得るとしても、中立は、公正な競争を確保する行為と同一視されるべきではない」と主張する。この例は、「中立的に行為することが不公正な状況がある、そして、中立であるべき明白な理由さえない状況がある」⁶ことを示している。このように、ラズは、中立(neutrality)と公正(fairness)は異なる概念であることを示している。

ラズによると、「中立は、当事者が援助または妨害される程度にのみ関わる。中立は、援助も妨害もしない行為については無言である」⁷。レスリー・グリーン(Leslie Green)は、ラズの中立の観念をジョン・ロールズ(John Rawls)やロナルド・ドゥオーキン(Ronald Dworkin)のものと対照させる。グリーンは言う。「ドゥオーキンとロールズは時々『中立』という言葉により、公

³ Raz, *The Morality of Freedom*, p. 113.

⁴ Ibid., p. 114.

⁵ Alan Montefiore, ed. *Neutrality and Impartiality: The University and Political Commitment* (London: Cambridge University Press, 1975), p. 7.

⁶ Raz, *The Morality of Freedom*, p. 114.

⁷ Ibid., p. 120.

平(impartiality)か公正(fairness)を意味しているにすぎないように見えるが、ラズは、中立を、ある競争の当事者を同程度援助または妨害することという、より狭い観念と同一視する。実際に、ラズにとって中立とは、ある人の損失が別の人の利益となる文脈においてのみ定義される⁸。ラズ自身、次のように指摘している。ロールズや他の政治的中立の支持者にとって、「中立とは、人々がよい充実した人生を送る機会に政治的行為が与える影響に関する情報を含む、非常に関連のある情報が無視されることを意味する。この無視の結果、人々が自分の価値観を実現する機会に、政治的行為が同程度の影響を与えることはありそうにない」⁹。私は、ラズのより厳密な中立の観念に同意する。ロールズやドゥオーキンの中立の観念は中立ではなく、単なるレトリックにすぎない。

ラズは、中立が得体の知れない概念であることを示すために、二つの議論を展開する。第一の議論において、ラズは次の例を挙げる。

二つの紛争当事国のどちらに対しても、貿易関係や他の関係をもたない国を考えてみよう。これは、ソマリアとエチオピアの間の戦争に対するウルグアイの関係に当てはまる。それでも、そのような国はどちらの当事国とも結びつきを確立することができたということは、本当かもしれない。ウルグアイが与えられたはずなのにエチオピアに与えなかった援助が、ウルグアイが与えられたはずなのにソマリアに与えなかった援助と同等でない限り、われわれはウルグアイは中立ではなかったと言うだろうか？もし、例えば、両当事国にとって有用だが、一方の国で不足しており、他方の国で不足していない商品をウルグアイが両当事国に供給することができたならば、これはそうではないだろう。それなら、ウルグアイは、その商品の不足に苦しんでいる国に供給し始めない限り、中立ではないと言うべきだろうか？もしその国を援助しないことで、ウルグアイがその国を妨害していれば、この結論がわれわれに押しつけられる。しかし、中立の一般的理解によると、もし前述の状況で、紛争勃発後、ウルグアイが当事国の一方に、軍事的に有用な物資を供給し始めたならば、ウルグアイはその中立を破ったことになるだろう¹⁰。

助けることと助けないことは共に中立的または非中立的であり得る。このようにして、ラズは、中立が得体の知れない概念であることを示している。サダースキーは、ラズの主張に反論する。

しかし、エチオピアに対する軍事的勝利を収めるのに必要な物資をソマリアに供給しないことによって、ウルグアイはソマリアを「妨害」し、それゆえ、この対立においてウルグアイがとれる中立路線は実際にはないというのは、本当にそうだろうか？私はそうは考えない。エチオピアもソマリアも、自国の軍事的資源に関する一連の合理的期待(rational expectations)

⁸ Leslie Green, "Un-American Liberalism: Raz's 'Morality of Freedom,'" *University of Toronto Law Journal*, Vol. 38, No. 3 (1988): p. 319.

⁹ Roberto Farneti, "Philosophy and the Practice of Freedom: An Interview with Joseph Raz," *Critical Review of International Social and Political Philosophy*, Vol. 9, No. 1 (2006): p. 73.

¹⁰ Raz, *The Morality of Freedom*, pp. 120–121.

を持って軍事的対立をしており、これらの期待には、とりわけ、自国の同盟国と供給国に関する情報が含まれる¹¹。

サダースキーは、ラズの例における中立の問題は、「つまるところ、第三国が紛争当事国のどちらかを必要な物資をもって援助するかどうかに関する、当事国の合理的期待の基礎(bases)ということになる」¹²と主張する。たとえそうだとした場合、合理的期待は、同じ状況下でさえ、行為者の想定によって変わり得る。したがって、合理的期待に訴えても、どの行為が中立なのか必ずしもわからない。

第二の議論において、ラズは、「人が中立的に行為しているかどうかは、その行為が判断される際の基準(base line)次第であり、相反する判断につながる異なる基準は常に存在し、他の基準よりもある基準を選ぶ合理的理由はない、と主張する」。たとえ基準がどの行為が中立なのかを示しても、「相反する判断につながる異なる基準は常に存在し、他の基準よりもある基準を選ぶ合理的理由はない」¹³。したがって、どの行為が中立なのかわからない。

ラズはまた、包括的中立(comprehensive neutrality)と狭い中立(narrow neutrality)を区別する。ラズは言う。「包括的中立は、当事者間の対立に関連するすべての事柄において、当事者を同程度援助または妨害することにある。狭い中立は、対立がなかったら当事者がするのを望まないであろう活動において、また対立がなかったら当事者が獲得するのを望まないであろう資源に関して、当事者を同程度援助または妨害することにある」¹⁴。この区別によると、「当事国の一方に武器を供給することは、狭い中立を危うくする、しかし、当事国の一方に食料を供給し続けることは、包括的中立を侵すが、狭い中立と両立する」¹⁵。

ラズは問う。「包括的な対立において、狭く中立であることができるだろうか」¹⁶？サダースキーによると、この問いでラズは、「国家ができるすべてのことは『狭い』中立の立場をとることだ」と暗示している。サダースキーは、ラズが「なぜリベラルな国家は『包括的に中立』であることができないのか」¹⁷を説明していないという理由で、ラズを批判する。理論的に言えば、包括的中立は、狭い中立より実現が難しい。実際には、後に見るように、狭い中立でさえ、ほとんど実現不可能である。したがって、包括的中立の実現可能性はほとんどゼロである。

サダースキーはまた、ラズの「リベラルな国家が中立的態度をとらなければならないであろう対立は『包括的』だ」という意見、すなわち、『包括的』中立だけが対立に対する適切な対応であろうという意見」¹⁸を疑問視する。実際に、ラズは書いている。

国家が中立であるべき対立は、人々が価値観（これには、よい社会やよい世界の理想が含ま

¹¹ Sadurski, "Joseph Raz on Liberal Neutrality and the Harm Principle," pp. 126–127.

¹² Ibid., p. 127.

¹³ Raz, *The Morality of Freedom*, p. 121.

¹⁴ Ibid., p. 122.

¹⁵ Sadurski, "Joseph Raz on Liberal Neutrality and the Harm Principle," p. 129.

¹⁶ Raz, *The Morality of Freedom*, p. 124.

¹⁷ Sadurski, "Joseph Raz on Liberal Neutrality and the Harm Principle," p. 129.

¹⁸ Ibid.

れる)を選択し、うまく追求する能力に関する対立である。価値観の選択と追求は、したがって包括的対立である。価値観の選択と追求に役立ち得るが、特に必要でないものは、価値観の選択と追求の外にはない。人生のすべてが、いわば、よい人生の追求に関わっている¹⁹。

ラズと違って、サダースキーは、狭い中立は時には対立に対する適切な対応だと考える。サダースキーは言う。「価値観は、特定の資源や保護を普通必要とするという意味で、『分解され』得るが、他の資源や保護は、この特定の価値観と他の価値観との競争とほぼ関連がない」。サダースキーは、次の例を挙げる。

猥褻文学の法的禁止に対する異なる姿勢から生じる対立において、国家の中立は、この特定の領域における特定の国家行為を必要とする。これらの既定の領域において、どんな特定の行為が中立の原理によって必要とされるかについて、われわれは意見が合わないかもしれない。しかし、この論争は、問題になっている対立の「包括性(comprehensiveness)」に起因しない。それどころか、この対立は、「中立な」政策の特定の内容について意見が合わないすべての人によって、かなり狭く局限され得る。

サダースキーは、ラズの言葉を言い改める。「価値観の選択と追求に役立ち得るが、特に必要でないものは、価値観の選択と追求の外に多くある」。言い換えれば、サダースキーは、「価値観の間の対立は『狭い』中立の妥当性を否定しないという意味で『包括的』だ」と主張している。サダースキーは書いている。

(国家の徹底的に無神論的な政策のせいで)聖職者になるという欲求が満たされない人は、自分のために創出されたスポーツの分野における余分の機会や、教育を受ける機会や、外国旅行の機会ではほとんど満足しないだろう。しかし、このことは、この人の大好きなライフスタイルと他の人々の大好きなライフスタイルとの間で中立であるように、国家が国家行為をこの人の欲求が必要とする援助に限定することが不可能であることを意味しない²⁰。

けれども、サダースキーは、この場合国家はいかにして狭く中立であり得るかの具体例を提供していない。その人に自分の大好きなライフスタイルを実現する何らかの機会を与えることによって、国家は中立であり得ると考える人がいるかもしれない。しかし、それは、無神論的共同体主義を好む人々にとって中立ではない。なぜなら、国家は、無神論的共同体主義より宗教的自由を重んじているからである。宗教的自由は、無神論的共同体主義と両立しない。国家は、それらの一方を犠牲にすることなく、他方を実現できない。

¹⁹ Raz, *The Morality of Freedom*, pp. 123–124.

²⁰ Sadurski, “Joseph Raz on Liberal Neutrality and the Harm Principle,” p. 130.

3. なぜ政治的中立はほとんど実現不可能なのか

もし狭い中立が包括的中立より実現しやすいなら、サダースキーの主張は、一つの妥当な妥協案として意味をなす。しかしながら、実際には、狭い中立でさえ、ほとんど実現不可能である。政治的中立の不可能性を示すために、ラズは、対立している行為者が二人しかいない単純な例を使っている。現実にははるかに複雑である。さまざまな程度の競合する価値観を持つ行為者がたくさんいる。したがって、政治的中立はほとんど実現不可能である。これを説明したい。

一つの測定できる価値観だけがあり、人々がそれをさまざまな程度欲していると仮定しよう。その価値の過剰も不足も、意に満たないとする。もし国家に行為者 A と行為者 B の二人しかなくて、それぞれがその価値をそれぞれ-4 程度と 6 程度欲していれば、国家は、彼らの欲求の平均である 1 程度提供することによって、中立であり得る。しかしながら、その価値を 1 程度欲する別の行為者 C が国家に加われば、国家は、その価値について中立ではあり得ない。彼らの欲求の平均は 1 だが、1 程度提供することは C をひいきすることになる。この場合、それぞれの行為者の欲求から等距離の数値は存在しない。中立であるために、国家は、すべての行為者の欲求から等距離の数値を見つけなければならない。現実には、さまざまな程度の欲求を持つ行為者がたくさんいる。したがって、中立な数値が存在する可能性はほとんどゼロである。

数学的に言えば、国家は、供給量を行為者の欲求から離れた値に定めることで、中立に近づくことができる。国家が供給量と行為者の欲求との間の距離をとればとるほど、国家は中立になる。先の例を使うと、供給量を非常に高く（例えば、1000）あるいは非常に低く（例えば、-1000）定めることで、国家は中立に近づくことができる。しかし、これらの量を欲する行為者はいない。

国家は、すべての人の必要と欲求を満たすために、できるだけ多く供給すべきだと考える人がいるかもしれない。もしこれが可能ならば、政治的中立の多くの問題はそもそも生じないであろう。政治的中立の問題は、国家が限られた量の財貨やサービスを、人々の間で、あるいはさまざまな用途の間で、分配しなければならないときに——これはしばしば現実である——生じる。そのような状況では、一つの用途のための財貨やサービスの過剰供給は、他の用途のための供給を減少させる。

政治的中立を実現することの困難さは、別の面からも生じる。私は、一つの測定できる価値観だけがある場合を論じた。実際には、多数の価値観がある。実現のために財貨やサービスをあまり必要としない価値観もあるが、実現のためにそれらを多く必要とする価値観もある。中立であるために、国家は限られた量の財貨やサービスを、それらの価値観の間で、中立的に分配しなければならない。異なる人々が、それぞれの価値観に異なる重きを置いているので、国家は、それぞれの価値観に関して、中立な重きを見つけなければならない。もし国家に行為者が二人しかいなければ、ある価値観に関する彼らの重きの平均が、その価値観に関する中立な重きを表す。しかしながら、実際には、それぞれの価値観に関して、異なる重きを置く行為者がたくさんいる。前に論じたのと同じ理由で、中立な重きが存在する可能性はほとんどゼロである。

もし価値観が測定できなければ、国家は、その価値について何が中立であるかを知ることはできない。政治的中立は、価値観が測定できることを前提としている。

リバータリアンの政策を採用し、国家の義務を最小限にすることで、これらの問題を避けようとする人がいるかもしれない。しかし、これは、リバータリアンのイデオロギーを他のイデオロギーよりひいきしているのだから、中立ではない。また、前に見たように、助けないことは、時には非中立的である。

4. 中立な政治の中立な正当化は不可能である

マイケル・ペリー(Michael J. Perry)は言う。「一つ以上の人間的価値観と比べて、少なくとも一つ、ひょっとしたらそれ以上のそのような価値観を重んじない——その権威や優越を前提としない——政治的正当化というものはない」²¹。ペリーはまた書いている。

もし、現実世界の政治論争に関していつもそうであるように、いくつかの人間的価値観（少なくとも一つの）によると、政治的共同体として、あることをする（例えば、対立する立場の間で中立である）のがわれわれにとってよいが、他の価値観（少なくとも一つの）によると、何か他のことをする（例えば、えこひいきのために中立を捨てる）のがわれわれにとってよいならば、二つの競合する立場の間で中立であろうとする政府の選択の正当化は——あるいは中立でなかろうとする政府の選択の正当化、あるいは、実際に、あらゆる事柄に関して、政府のどんな紛争中の選択の正当化も——すべての競合する人間的価値観の間で、到底中立ではあり得ない。一方か他方の紛争中の選択を目指して争うことにおいて、正当化は、一方か他方の競合する価値観に味方——それを承認か肯定——しなければならない²²。

同じことが、中立な政治の正当化にも当てはまる。正当化は、えこひいきを避けられない。ペリーは書いている。

中立な政治的正当化の中立な正当化はない。特定の政治的正当化の実行——中立な政治的正当化を含む——を目指して争うことは、特定の政治観(conception of politics)、つまり、政治的正当化の実行によって構成される政治を目指して争うことである。競合する政治観がたくさんある（中立的、神政的、スターリン主義的など）。中立な政治を含む競合政治観のどれか一つの中立な正当化があると考えるのは非現実的である²³。

ロールズやチャールズ・ラーモア(Charles Larmore)のような哲学者は、われわれが到達できる共通の基盤、すなわち、さまざまな価値観の「重なり合うコンセンサス(overlapping consensus)」

²¹ Michael J. Perry, "Neutral Politics?," *Review of Politics*, Vol. 51, No. 4 (1989): p. 480.

²² *Ibid.*, pp. 480-481.

²³ *Ibid.*, p. 481.

に政治原理を基礎づける政治的リベラリズム(political liberalism)を提示する²⁴。ラーモアは言う。

「中立の原理は、われわれがたまたま傾倒している、よい人生についての物議をかもし見解に訴えることなく正当化できるものである」²⁵。しかし、政治的リベラリズムを採用することは中立だろうか？政治的リベラリズムそのものが、ペリーの言葉を借りれば、「特定の政治観」²⁶、すなわち特定の価値観である。政治的リベラリズムは、主な信念が中立の原理でない人よりも、主な信念が中立の原理である人を重んじている。

哲学的に言えば、中立な政治に中立な根拠はない。われわれは、すべての政治がある価値観に傾いていることを理解しなければならない。

5. 結論

ラズは、中立と公正は異なる概念であることを示している。中立的に行為することが不公正な場合があり、中立であるべき理由がない場合がある。ラズの中立の概念は、ロールズやドゥオーキンのものより厳密である。ラズは、助けることと助けないことは共に中立的または非中立的であり得、したがって、中立は得体の知れない概念であることを示している。サダースキーのように合理的期待に訴えても、どの行為が中立であるかは必ずしもわからない。ラズはまた、包括的中立と狭い中立を区別し、前者のみが対立に対する適切な対応だと主張する。サダースキーは、これを批判し、対立は狭い中立の妥当性を否定しないという意味で包括的だと主張する。

しかしながら、実際には、狭い中立でさえ、ほとんど実現不可能である。政治的中立の不可能性を示すために、ラズは、対立している行為者が二人しかいない単純な例を使っている。現実にははるかに複雑である。さまざまな程度の競合する価値観を持つ行為者がたくさんいる。したがって、政治的中立はほとんど実現不可能である。もし価値観が測定できなければ、国家は、その価値について何が中立であるかを知ることはできない。また、リバータリアンの政策の採用は中立をもたらさない。

哲学的に言えば、中立な政治に中立な根拠はない。われわれは、すべての政治がある価値観に傾いていることを理解しなければならない。

競合する価値の間の対立を最小限にすることは可能かもしれない。しかし、われわれは、この試みを、運の尽きた中立な政治の追求から区別しなければならない。対立する価値に関する政治的議論は、中立の実現方法についてではなく、どの価値をわれわれは追求すべきかについてであるべきである。

²⁴ John Rawls, *Political Liberalism*, exp. ed. (New York: Columbia University Press, 2005); Charles Larmore, "Political Liberalism," *Political Theory*, Vol. 18, No. 3 (1990).

²⁵ Larmore, "Political Liberalism," p. 341.

²⁶ Perry, "Neutral Politics?," p. 481.

文献表

本稿中の引用は拙訳による。

- Farneti, Roberto. “Philosophy and the Practice of Freedom: An Interview with Joseph Raz.” *Critical Review of International Social and Political Philosophy*, Vol. 9, No. 1 (2006): pp. 71–84.
- Green, Leslie. “Un-American Liberalism: Raz’s ‘Morality of Freedom.’” *University of Toronto Law Journal*, Vol. 38, No. 3 (1988): pp. 317–332.
- Larmore, Charles. “Political Liberalism.” *Political Theory*, Vol. 18, No. 3 (1990): pp. 339–360.
- Montefiore, Alan, ed. *Neutrality and Impartiality: The University and Political Commitment*. London: Cambridge University Press, 1975.
- Perry, Michael J. “Neutral Politics?” *Review of Politics*, Vol. 51, No. 4 (1989): pp. 479–509.
- Rawls, John. *Political Liberalism*. exp. ed. New York: Columbia University Press, 2005.
- Raz, Joseph. *The Morality of Freedom*. Oxford: Oxford University Press, 1986.
- Sadurski, Wojciech. “Joseph Raz on Liberal Neutrality and the Harm Principle.” *Oxford Journal of Legal Studies*, Vol. 10, No. 1 (1990): pp. 122–133.

